ゆい
2025年夏　第11号

能登を訪ねて

「令和６年（2024 年）１月１日 16 時 10 分、石川県能登地方においてマグニチュード 7.6（暫定値）の地震が発生し、石川県の志賀町及び輪島市で震度７を観測したほか、能登地方の広い範囲で震度６以上の揺れを観測しました。この地震のみならず、１月１日 16 時６分の最大震度５強の地震以降、２月 16 日 11 時までに、震度７を１回、震度６弱を２回、震度５強を８回、震度５弱を７回観測し、震度１以上の地震は合計 1,651 回を数える等、地震発生から２カ月以上経過した今でも、地震活動は継続しています。」（内閣府防災情報のページより）

その日、元日の午後、私は年賀状の整理をしていて、強い揺れに「震源地はどこ？」とテレビを見つめ、能登半島という情報に驚いた。能登に住む学生時代の友人２人のことが案じられ、数日後、そのうちの一人と電話が通じた。彼女は、家が壊れるかと大きな揺れに驚き、余震のたびに怖さがよみがえると話す。幸い、電気も水も通じて、家も修理は必要だが住める状態で助かっている。もう一人の友人は避難所生活と知らせてくれ、道路が寸断されて、出かけるのが怖いので、身近な人への救援も少ししかできずにいると。私は、ただ彼女の話を聞くことしかできなかった。

それから１年半ほど経った 2025 年５月末、能登半島の七尾に２人に会いに行った。大宮から新幹線と JR 七尾線と乗り継いで約３時間、七尾駅で待つなつかしい姿があった。時は学生時代に戻り、にぎやかな会話が弾む。でも、壊れたところがそのままの家、重機で解体中のところ、空き地に雑草、家は無事でもシャッターが閉まったまま、そういう通りを歩くと心が沈む。メインの通りなのに人がいないのだ。学校を卒業してから地元に戻り仕事を続けた彼女たちは、以前の生活に戻す努力をしている。お互い身体には気をつけてまた会おうと約束する。

次の日彼女たちと別れ、私は、輪島市の復興支援ツアーに参加した。地震と豪雨で二重の被災をした輪島市の「今」を伝えたいとツアーを始めた若者に案内していただいた。海辺の公園には斜めに歪んだベンチがそのまま、地面が隆起して水深が浅くなりたくさんの漁船が動かせず並んでいる。海面を掘り港に戻す工事が続いている。校庭や公園などの広い所には仮設住宅が建てられ、子どもたちがのびのびと球技を楽しむ場所もない、よその地に避難した子どもたちはいまだに帰らずにいる人たちが多いという。有名な朝市通りに並ぶ家々は火災で焼失し、整地された地面が遠くまで広がる。近くのショッピングセンターに仮設の朝市が並んでいるが、ここに賑わいが戻るのはいつになるのだろうか。訪ねることが支援につながるのだ、そして、見て聞いたことを伝えてほしいという思いは受け止めたい。厳しい現実を受け止めながら、日々の暮らしを取り戻す人々の努力は尊く、それは他人ごとではないと強く感じた。　（礒部）

『ルポ　食が壊れる　私たちは何を食べさせられるのか？』

堤未果著
文春新書
（2022年）

遺伝子組み換え作物とセット売りの農薬・化学肥料により、農地（土の微生物・虫）を破壊し、畜産の工業化によっても生態系を破壊し温暖化の原因を作ってきた、ビル・ゲイツなどの巨大資本家、多国籍企業。その破壊の中で生きさせるために生物の遺伝子組み換えやゲノム編集するのも、その販売権を独占し更なる富を得るためだ。農地を買い占め、農民に「維持するにはデジタルテクノロジーが必要」と言い、データを吸い上げ、在来種子を育てる権利も奪っている。遺伝子組み換えが問題とされる中、日本ではゲノム編集は「組み換えではない」とこじつけて、表示義務なく一般食品の棚にゲノム編集作物が並んでいる。恐ろしい状況ではないだろうか？

抗生剤を使い劣悪な環境で飼育された動物は、本来の抵抗力が弱り、牛は口蹄疫で死んでしまうようになった（通常は死なない）。

牛に牧草をやり、腸内細菌を育て、牛の体も土も健康にして、同時に炭素も土に閉じ込める。そのような元来あった道が、地球温暖化対策に最も有効なアグロエコロジーだ。

土の微生物を復活させ（輪換放牧や、高機能炭での農地の土地再生等）、地域ごとに異なる土に合った在来種子による農業を続け、農民・住民の共同体を作り上げ（韓国では女性が種子を守ってきた）、農業・農政への参加の実感を育み、協同組合により権力を分散することもアグロエコロジーの形だ。

TV のコメンテーターが「今はよい除草剤があるからそれを使えばよい」と言っていたが、怖くなった。全ての農薬が最初は「安全」と言われ導入されるからだ。農薬汚染は土だけでなく、空気にも及ぶ。身を守るため手に取ってほしい本だ。　　（野田）

『グレートウーマンに会いに行く　それぞれの人生と活動にリスペクトを込めて』

福島みずほ編
現代書館
（2024年）

社会民主党党首で、参議院議員、弁護士の福島みずほが、勝手に「グレート！」だと思う人に勝手に会いに行く「グレートウーマンに会いに行く」というYouTube をはじめ、それが本になった。

「地域で輝く」「法の現場」「ケアの現場」「教育現場」「平和を願う」「共生社会を目指す」「ジェンダー平等を目指す」の7つの章に、それぞれの年齢も環境も取り組んでいるテーマも全く違うが、地域で長年いろんな人たちと手をつなぎ、すばらしい活動をしている22名の女性たちが登場する。その対話を活字にしたものである。先駆者として、あるいは長年にわたって取り組み続ける女性たちは、生き生きと思いを語る。それは、聞き手の福島みずほが、その思いを共に追いかけたり、後を守ってきたりとそれぞれを尊重、尊敬しているからなのだろう。読み手の私にもそれぞれの人柄や活動の様子、生き方が伝わってくる。

私は、その中のお一人、大谷恭子さんにお会いしたことがある。永山則夫連続射殺事件、永田洋子連合赤軍事件や地下鉄サリン事件などたくさんの事件を担当された弁護士であるが、傷ついた若い女性を支援する若草プロジェクトにかかわっておられた。彼女が育った十条にあるお店で著書『共生社会へのリーガルベース（法的基盤）差別とたたかう現場から』（現代書館）を手にしたら、大谷さんがおられた。少しお話をして、書物にサインをしていただいた。「共に！」という言葉に勇気をもらい、後に続きたいと思った。2023 年の5月の事であったが、大谷さんは 2024 年 10 月に亡くなられた。グレートウーマンが切り開き、広げてくれた道をどう踏みしめ、固めていくのか、問われていると思う。　　（礒部）

『再生
西鉄バスジャック事件からの編み直しの物語』

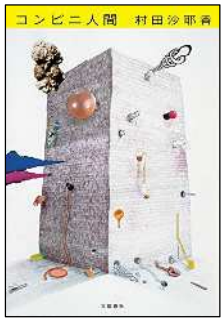
山口由美子
岩波書店
（2024年）

2000年5月3日佐賀駅バスセンターから福岡天神行に乗り、17歳の少年が起こした「バスジャック事件」に遭遇し被害者になった山口さんが、西鉄高速バスの車中で起きた悲惨な様子、命は助かりましたが大怪我の治療とリハビリ、自分の家族の事や事件を起こした少年とその家族の事について書かれた本です。

山口さんは近所で仲の良い塚本さんと福岡で開催されるコンサートに行くためにこのバスに乗っていました。塚本さんはモンテッソーリ教育を軸にした「幼児室」を開いていて、子育てで悩んでいた山口さんが相談に行き教室に通うようになって仲良くなっていき、お互い家族ぐるみの付き合いになっていきます。とても楽しみにしていたコンサートに行く途中の悲劇、塚本さんはバスの中で亡くなります。

どうして私は助かったのかと悩み苦しんでいた時、普通の生活ができるようになった頃に被害者としてのお話をする機会がありました。いろんなところで話をしているうちに悩んでいたことの答えが見つかり、塚本さんの「幼児室」で学んだことを生かそうと考えるようになります。そして加害者の少年と話をし、両親の話を聞いてどうして子どもの立場で考えられないのかと思うようになります。いろんな人と出会い話をして不登校の子どもたちの「居場所」を作りたいと思い自宅を開放することにしました。しかし子どもを集めるのは大変で、まず不登校の子を持つ「親の会」が2001年7月に始まりました。こうして山口さんは「被害者の視点、加害者の視点」を考えながら活動を続けています。大家族にも核家族にも良いところと悪いところがあります。家族の問題は家族だけの問題にしないで地域や周りの人みんなで子どもを育てたいと思いました。　（あや）

『コンビニ人間』



村田紗耶香
文藝春秋社
（2016年）

「あの人ヘンなの」「常識外れ」「変わり者」「何考えているのかわからない」などと人様の言動を思ったことはないだろうか。では「ヘンの反対はまとも、まともな人って？」「常識って誰がどのように決めたの？」「変わり者ばかりの中に変わらない人がいたら、どうなの？」「そもそも人が考えていることなど知ってどうするの？」ああ、頭の中は混乱している。

主人公の古倉恵子、コンビニバイト歴18年。彼氏なしの36歳。「私の細胞全部が、コンビニのために存在しているのです。」と言う。古倉恵子は、幼いころ、考える事、行う事が他の子と違うことに気づき、その後、普通の人間という皮をかぶって、マニュアル通りに振舞って生きてきた。大学1年の時に迷い込んだ新装開店前のコンビニ。そこでアルバイトを始め、完璧なマニュアルのあるコンビニエンスストアの「店員」になったのだ。

コンビニの朝、「外から人が入ってくるチャイムの音が、教会の鐘の音に聞こえる。ドアをあければ、光の箱が私を待っている。いつも回転し続ける、ゆるぎない正常な世界。私は、この光に満ちた箱の中の世界を信じている。」と、古倉恵子は言い切る。

次々とコンビニ人間の古倉恵子が描かれ、コンビニという場を客として知っている自分もコンビニに引き込まれそうになる。私はまともな人で、常識があって、ヘンな人じゃないはずなのに、古倉恵子に何も言えないなぁと思ってしまう。

「“普通”とは何であるか？執拗なまでに問い続けてきた村田作品の集大成！」と文庫本の帯に書いてあった。そこにたどり着く前に、古倉恵子の心の声やマニュアル通りにまっすぐに行動する姿に、なんでこうなるのとか、それでいいのかと、やはり、私の頭はぐちゃぐちゃである。　（さち）

2025 年度公募型共済事業

第 31 回「ブックトーク＆井戸端会議」　さいたま市女性学研究会（ゆい）主催

2025 年 9 月 14 日（日） 14:00～16:00 パートナーシップさいたま 第 3 会議室 定員 24 名

「普通」とは何か？ あなたは、この問いかけにどう答えますか？

『コンビニ人間』 村田沙耶香 文藝春秋社 単行本（2016 年） 文庫本（2018 年）

〈文春文庫〉

36 歳未婚、彼氏なし。コンビニのバイト歴 18 年目の古倉恵子。日々コンビニ食を食べ、夢の中でもレジを打ち、「店員」でいるときのみ世界の歯車になれる――。「いらっしゃいませー!!」お客様がたてる音に負けじと、今日も声を張り上げる。ある日、婚活目的の新入り男性・白羽がやってきて、そんなコンビニ的生き方は恥ずかしい、と突きつけられるが……。第 155 回（2016 年）芥川賞受賞作。

「普通」とは何か？世間のものさしを問い直すことは必要か、考えてみませんか。

参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。参加費 200 円。

事務局〈礒部〉 電話：048-641-3765 E メール： i.sachie@nifty.com

💻パートナーシップさいたま耳寄り情報📰

性暴力防止セミナー（オンデマンド配信・参加費無料）
「生命（いのち）の安全教育 ～子どもからの SOS に備えるために～」

▸内　　容
　子どもも大人も性暴力の加害者にも被害者にも傍観者にもならないために、科学にもとづく性知識など「性」について一緒に学びませんか。

▸講　　師
　高橋幸子さん（埼玉医科大学 医療人育成支援センター・地域医学推進センター 助教）
　埼玉医科大学病院 産婦人科 助教〈思春期外来担当〉、 埼玉医科大学 医学教育センターを兼担。「サッコ先生」の愛称で、多くの性教育の講演を行う。 著書には、『12歳までに知っておきたい男の子のためのお家でできる性教育』（日本文芸社）、『自分を生きるための＜性＞のこと SRHR（性と生殖に関する健康と権利）編』（少年写真新聞）などがある。

▸配信期間　令和７年８月１日(金)から８月 31 日(日)
▸申込期間　令和７年７月４日(金)から８月 17 日(日)
▸対　　象　どなたでも
▸詳細及びお申込みはホームページから
https://www.city.saitama.lg.jp/006/010/002/004/p120548.html

ホームページ

「ゆい」 2025 年夏号　第 11 号　（2025 年 7 月 1 日発行）
編集　さいたま市女性学研究会（ゆい）　　マーク、題字　野田
＜事務局＞礒部幸江　電話 048-641-3765　Eメール　i.sachie@nifty.com
発行　さいたま市男女共同参画推進センター｜パートナーシップさいたま
〒330-0854 さいたま市大宮区桜木町１丁目10－18シーノ大宮3F　電話 048-642-8107
https://www.city.saitama.lg.jp/006/010/002/index.html